

# こわれた すいとう 水筒

ケイディーはのどがカラカラでした。ソフィアにはどんな助けができるでしょうか？

ノエル・ランバート・バラス  
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話は、シエラレオネでの出来事です。

ソフィアは先生が黒板で算数の問題について説明するのを、しっかりと聞いていました。

「さあ、 $4 \times 9$  はいくつですか？」と先生がたずねます。

ソフィアは手を上げました。「36です！」と答えました。

先生はにっこりとほほえみました。「そのとおりよ、ソフィア！」授業が終わり、家に帰る時間になりました。ソフィアは友達と一緒に歩きました。みんな水筒を取り出して、最後の水を飲んでいきます。今日は暑いです！

でもソフィアは、友達ケイディーを見て、何かがおかしいと



おも思いました。水を飲んでいなかったのです。ケイディーは、何も言わずに歩いていました。

「ケイディー、あなたの水筒はどこ？」ソフィアはたずねました。いつでも、学校が終わるころには、だれもがのどがかわいていました。

「昨日こわしてしまって、新しいのは手に入らないの」とケイディーは言いました。「だから、もう学校に水を持って行けないの。」

ソフィアは自分の水筒を見ました。分けてあげられたらいいのに！しかし、水はもう全部飲んでしまっていました。

ソフィアは一日中、ケイディーとこわれた水筒のことを考えていました。彼女たちが住んでいる所では、きれいな水を手に入れるのは簡単ではありませんでした。ほとんどの子が、一年中使う水筒を1本しかもらえません。大きな容器に入ったきれいな水が家であって、それを水筒に満タンに入れていたのです。それ以外の水を飲めば、病気になるかもしれません。ケイディーは水筒がないかぎり、家から水を持って行って学校で飲むことはできないのです。

翌朝、ソフィアはケイディーを助ける方法を考えました。ソフィアの家族は、水が入ったプラスチックのボトルをいくつか持っていました。ソフィアはリュックに自分の金属製の水筒のほかに、そのボトルも一本入れました。リュックが少し重くなりましたが、気になりません。

学校に着くと、ケイディーを見つけました。

「ケイディー、新しい水筒は手に入った？」ソフィアはたずねました。

ケイディーは下を見ながら首を横にふりました。

「大丈夫よ」とソフィアは言いました。「あなたの分を持ってきたわ！」

ソフィアはケイディーに水のボトルをわたしました。ケイディーはにっこりしました。

「ありがとう、ソフィア！」ケイディーはソフィアを強くだきしめました。

授業中、ケイディーは水を、ボトルからほかの子たちと同じように飲みました。ソフィアは、友達がのどがかわくことがなくなったのを見て、うれしくなりました。

その週、ソフィアは毎日、ケイディーのために、1本余分に水のボトルを持って行きました。ある朝、ソフィアのお母さんがリュックを持ち上げました。

「うーん」とお母さんが言いました。「いつもよりも重いわね。」お母さんは、リュックを開けて水のボトルを取り出しました。

「ソフィア、学校にこのボトルも持っていくつもりだったの？」

お母さんがたずねました。

ソフィアはうなずきました。「ケイディーの水筒がこわれて、新しいのを手に入れられないんだって。だから、学校で全然水がなかったの。」

「どのくらいの間、あなたはその子にこの予備の水を持って行っていたの？」お母さんがたずねました。

「今週だけよ」とソフィアは言いました。「ケイディーがのどがかわいたらかわいそうだな、と思って。」

お母さんはにっこりとわらいました。「あなたは、友達思いで、とてもやさしいのね。イエス様ならそうされるわよね。あなたがイエス様のようになるのはうれしいわ。」お母さんはソフィアをだきしめました。「でも、ほかにも助ける方法があると思うのよ。」

お母さんはソフィアに金属製の水筒をわたしました。「お友達がかかりかえし使えるように、これを代わりにわたしてちょうだい。そうすれば毎日プラスチックのボトルを持って行く必要はないわ。」

「ほんとうに？」とソフィアが聞きました。

お母さんはうなずきました。「そうよ。ただし、大切にするように言ってね。」

ソフィアは、その水筒を学校に持って行きました。まずはケイディーに水筒をわたします。

「わあ」とケイディーは言いました。「ありがとう、ソフィア！」ケイディーはソフィアをだきしめました。

ソフィアは胸が熱くなるのを感じました。イエス様ならそうされるように、自分は友達を助けたのだということを知りました。●



あなたは、これまでどのような方法で人を助けてきましたか？